



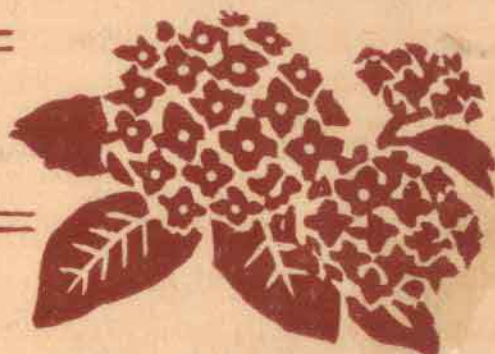
角川文庫

—2619—

春宵十話

岡

潔



角川書店



昭和四十四年十一月十日
昭和四十五年十二月三十日
初版発行
五版発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

角川文庫

話 十 宵 春



著 者

岡 おか

潔 きよし

発 行 者

角 川 源 義

印 刷 者

中 内 佐 光

東京都文京区大塚六ノ二ノ五

発 行 所

東京都千代田区富士見二ノ十三
①一〇二 ②東京一九五二〇八

株式 会社 角川書店
電話東京(265)三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

本間製本・印刷

春 宵 十 話

岡 潔



角川文庫

2619

はしがき

人の中心は情緒である。情緒には民族の違いによっていろいろな色調のものがある。たとえば春の野にさまざまな色どりの草花があるようなものである。

私は数学の研究をつとめとしてゐる者であつて、大学を出てから今日まで三十九年間、それのみにいそしんできた。今後もそうするだろう。数学とはどういうものかという、自らの情緒を外に表現することによって作り出す学問芸術の一つであつて、知性の文字板に、欧米人が数学と呼んでいる形式に表現するものである。

私は、人には表現法が一つあればよいと思つてゐる。それで、もし何事もなかったならば、私は私の日本の情緒を黙々とフランス語で論文に書き続ける以外、何もしなかったであらう。私は数学なんかをして人類にどういふ利益があるのだと問う人に対しては、スマイレはただスマイレのように咲けばよいのであつて、そのことが春の野にどのような影響があらうとなかろうと、スマイレのあずかり知らないことだと答えて来た。

その私が急に少しお話ししようと思ひ立つたのは、近ごろのこのくにのありさまがひどく心配になつて、とうてい話しかけずにはいられなくなったからである。その結果がこの小冊子となつ

た。

すべて、私が話したところを、毎日新聞社の松村洋君がまとめて文につづったものである。

一九六三・一・三〇

岡 潔 識す

目次

はしがき

三

春宵十話

人の情緒と教育

九

情緒が頭をつくる

三

数学の思い出

五

数学への踏み切り

元

フランス留学と親友

三

発見の鋭い喜び

六

宗教と数学

三

学を楽しむ

三

情操と智力の光

自然に従う

*

宗教について

日本人と直観

日本の情緒

無差別智

*

私の受けた道義教育

絵画教育について

一番心配なこと

顔と動物性

三河島惨事と教育

義務教育私話

*

四七

六五四四

九七六八七九

数学を志す人に

数学と芸術

音楽のこと

好きな芸術家

女性を描いた文学者

*

奈良の良さ

相撲・野球

新春放談

ある想像

中谷宇吉郎さんを思う

吉川英治さんのこと

わが師わが友

二三

二〇

二五

二六

二四

二四

二九

二五

二五

二六

二六

二七

春宵十話

人の情緒と教育

私はなるべく世間から遠ざかるようにして暮らしているのだが、それでも私なりにいろいろな感じることがあり、世間の人に聞いてほしいと思うこともある。それを中心にお話ししてみよう。

これは日本だけのことでなく、西洋もそうだが、学問にしる教育にしる「人」を抜きにして考えているような気がする。実際は人が学問をし、人が教育をしたりされたりするのだから、人を生理学的にみればどんなものか、これがいろいろの学問の中心になるべきではないだろうか。しかしこんな学問はまだないし、医学でも本当に人を生理学的にみようとはしていない。それをめざしているのかもしれないが、それにしても随分遅れている。

人に対する知識の不足が最もはつきり現われているのは幼児の育て方や義務教育の面ではなからうか。人は動物だが、単なる動物ではなく、渋柿の台木に甘柿の芽をついだようなもの、つまり動物性の台木に人間性の芽をつぎ木したものといえる。それを、芽なら何でもよい、早く育ち

さえすればよいと思って育てているのがいまの教育ではあるまいか。ただ育てるだけなら渋柿の芽になってしまつて甘柿の芽の発育はおさえられてしまう。渋柿の芽は甘柿の芽よりずっと早く成育するから、成熟が早くなるということに対してもっと警戒せねばいけない。すべて成熟は早すぎるよりも遅すぎる方がよい。これが教育というものの根本原則だと思う。

戦後、義務教育は延長されたのに女性の初潮は平均して戦前より三年も早くなっているという。これは大変なことではあるまいか。人間性をおさえて動物性を伸ばした結果にほかならないという気がする。たとえば、牛や馬なら生まれ落ちてすぐ歩けるが、人の子は生まれて一年間ぐらひは歩けない。そしてその一年の間にこそ大切なことを準備している。とすれば、成熟が三年も早くなったのは、人の人たるゆえんのところを育てるのをおろそかにしたからではあるまいか。ではその人たるゆえんはどこにあるのか。私は一にこれは人間の思いやりの感情にあると思う。人がけものから人間になったというのは、とりもなおさず人の感情がわかるようになったということだが、この、人の感情がわかるというのが実にむずかしい。赤ん坊の心の大きくなり方を観察しても、最も難渋をきわめるのがこのところで、なかなか感情がわかるまでにならない。人類が人の感情がわかるようになるまでには何千年どころではなく、無限に近い年月を要したに違いないと思われるくらいにわかりにくい。数え年で三つの終りごろから感情ということがややわかるが、それはもっぱら自分の感情で、他人の感情がかすかにわかりかけるのは数え年で五つぐらいのころからのような。その間二年ばかり足踏みしていることになる。しかし、そのデリケート

な感情がわからないうちは道義の根本は教えられない。

私も最近、最初の孫を持って、無慈悲を憎む心や思いやりの気持を持たせようと思い、感情がいつわかるようになるかと手ぐすねひいて待っているが、なかなかわからない。といって、いわゆるしつけは一種の条件反射で、害あって益のないものだからやりたくないが、あまり気ままな雑草が生い茂っても困るのでしつけをせねばならないのだろうかと悩んでいる。やはり心を育てる時期はあるに違いない。それは植物でも茎、枝、葉が一様に平均して育つのではないのと同じことである。ある時期は茎が、ある時期は葉が主に伸びるということぐらいは、戦時中みんなカボチャを作ったから知っているはずだが、人間というカボチャも同じだとは気がつかず、時間を細かく切つてのぞいて、いいとか悪いとか、この子は能力があるとかないとかいつている。

どうもいまの教育は思いやりの心を育てるのを抜いているのではあるまいか。そう思ってみると、最近の青少年の犯罪の特徴がいかに無慈悲なことにあると気づく。これはやはり動物性の芽を早く伸ばしたせいだと思う。学問にしても、そんな頭は決して学問には向かない。夏目漱石の弟子の小宮豊隆さんと寺田寅彦先生の連句に、小宮さんが「水やればひたと吸い入る墓の苔」と詠み、寺田先生がこれに「かなめのかげに動く蚊柱」とつけたのがある。小宮さんはこれを評して寅彦のつけ方のふわつとしていることは天下一品だといっているが、それはともかく、ちょうどこんなふうに、乾いた苔が水を吸うように学問を受け入れるのがよい頭といえる。ところが、動物的発育のためにそれができない頭は、妙に図太く、てんで学問なんか受け付けけない。中学や

高校の先生に聞いても、近ごろの子はそんなふうに教えにくいといっている。

いま、たくましさはわかってても、人の心のかなしみがわかる青年がどれだけあるだろうか。人の心を知らなければ、物事をやる場合、緻密さがなく粗雑になる。粗雑というのは対象をちっとも見ないで観念的にものをいっているだけということ、つまり対象への細かい心くばりが無いということだから、緻密さが欠けるのはいっさいのものが欠けることにほかならない。長岡半太郎さんが寺田寅彦先生の緻密さについてふれていたが、文学の世界でも、寺田先生の「藪柑子集」特にその中の「団栗」ほどの緻密な文章はもういまではほとんど見られないのではなからうか。

情緒が頭をつくる

頭で学問をするものだという一般の観念に対して、私は本当は情緒が中心になっているといいたい。人には交感神経系統と副交感神経系統とあり、正常な状態では両方が平衡を保っているが、交感神経系統が主に働いているときは、数学の研究でいえばじわじわと少しずつある目標に詰め寄っているときで、気分からいうと内臓が板にはりつけられているみたいで、胃腸の動きはおさえられている。副交感神経系統が主に働いているときは調子に乗ってどんどん書き進むことができる。そのかわり、胃腸の動きが早すぎて下痢をする。

最近、ある米国の医学者が犬を使って交感神経系統を切断する実験をやったが、結果は予期し

たとおり下痢を起し、大腸に潰瘍ができた。人でも犬でも、根本の生理は変らない。感情に不調和が起ると下痢をするというが、本当は情緒の中心が実在し、それが身体全体の中心になっているのではないか。その場所はこめかみの奥の方で、大脳皮質から離れた頭のまん中にある。ここからなら両方の神経系統が支配できると考えられる。情緒の中心だけでなく、人そのものの中心がまさしくここにあるといつてよいだろう。

そうなれば、情緒の中心が発育を支配するのではないか、とりわけ情緒を養う教育は何より大事に考えねばならないのではないか、と思われる。単に情操教育が大切だとかいったことではなく、きょうの情緒があすの頭を作るという意味で大切になる。情緒の中心が実在することがわかると、劣等生というのはこの中心がうまくいってない者のことだから、ちょっとした気の持ちよう、教師の側からいえば気の持たせ方が大切だということがわかる。また、学問はアビリティーとか小手先とかでできるものではないこともわかるだろう。

いまの教育に対する不安を述べると、二十歳前後の若い人に、衝動を抑止する働きが欠けていることである。抑止の働きは大脳前頭葉の働きで、大脳前頭葉を取り去ってもなお生命は保てるが、衝動的な生活しか営めない。試験のときでも、意味も十分わかっていないのにすぐ鉛筆をとって書き始めるなどは衝動的な動作だ。だから衝動の強く働いている現状は、一般に大脳前頭葉の発育不良といえる。西洋流の教育は一口にいえば大脳の発育が中心で、父兄もそう思っている。まあいまは就職の方へ気持がいつてしまっているから、どうか知らないが、少なくとも最近まで

はそうだった。にもかかわらず、教育の結果は脳前頭葉の發育不良という形で出ている。もうしばらくすると、こんなのが日本人だということになりかねない。そこで教育の根本を変えてもraitたいが、大きな汽船が綱で和船をひっぱっているときと同じで、教育は徐々に変えなければ混乱が起る。だから、いまの世代については直しようがない。その世代が社会の中堅になったとき困らないように、年下でしっかりした世代を養成するほかないが、そのとき混乱を起さないためには、いまから年齢などにあまり重点をおかない習慣をつける方がいいだろう。年長者を大事にしろというしつけをしていると、将来困ることが起きるかもしれない。

さきに副交感神経系統についてふれたが、この神経系統の活動しているのは、遊びに没頭するとか、何かに熱中しているときである。やらせるのではなく、自分で熱中するというのが大切なことなので、これは学校で機縁は作れても、それ以上のことは学校ではできない。戦争中、小さな子から遊びをとりあげてしまい、戦後まだ返してやってないが、これでは副交感神経系統の協力しているノーマルな脳の働きは出ないのではなからうか。こうしたことが忘れられているのは、やはり人の中心が情緒にあるというのを知らないからだと思う。

教育だけではない。たとえば国語問題でもそうだ。この二月に二番目の孫ができ、名前をつけてくれというので考えたが、当用漢字だけで名をつけろというのには弱った。人名用漢字というものもあるが、これは「虎」や「熊」や「鹿」ばかりでどうにもならない。当用漢字は一般的にいて、ムードとかふん囲気とかをあらわす字を削り、具体的な内容をもった字だけを残した。

「悠久」という文字が私は好きだが、「久」は当用漢字にあっても、時間を超越した感じをあらわす「悠」の方はない。二月生まれだから「もえいずる」の意味で「萌」の字を使いたかったが、これも当用漢字にないので仕方がなかった。

日本語は物を詳細に述べようとするとは不便だが、簡潔にいい切ろうとすると、世界でこれほどいいことばはない。簡潔ということは、水の流れるような勢いを持っているということだ。だから勢いのこもっている動詞を削ったり、活用を変えたりするには賛成できない。ともかく、感じをあらわす字を全部削ったのは、やはり人の中心が情緒にあることを知らないからに違いない。

数学の思い出

私は数学を専攻しているので、人に小学校のころから数学がよくできたんじゃないかといわれる。しかし小学校で数学がよくできたような記憶は一つ二つしかない。いまは橋本市内になっている郷里紀見村の柱本小学校に二年生の中ごろまでいて、それから大阪市北区の菅南小学校に移ったが、三、四年生のころ、父に国語の学習帳の書き方がきたなく、それにしまいまで書いてないと言われたことがある。その時「お前は算術は終わりまできちんと言っているではないか。それは算術の方ができるからだ」といわれた。また、四年生のとき、先生からいくつかの算術の問題を早く正しく解く競争をさせられ、私は二番だった。一番は高浜という銀行家の息子だった。